



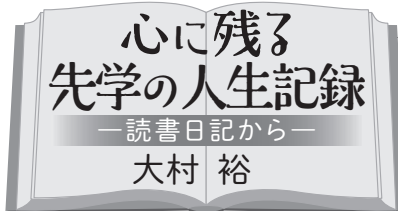
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.203
2020.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第17回

坪井良平 著『わが心の自叙伝〈5〉』

(のじぎく文庫 1973年)

私が在野研究者として尊敬してやまない梵鐘研究の大家・坪井良平(1897~1984年)の自叙伝である。坪井良平に関しては、子息・清足(奈良国立文化財研究所長などの要職を歴任)による簡にして要を得た紹介記事があり(「父 坪井良平」『画竜点睛』所載)、研究者としての良平の活動に対し、私が蛇足を加える余地はない。ただし、近親を語る執筆者の常として、感情的な表現や礼賛を控え、生活者としての良平にあまり言及していない点に、やや物足りなさを感じる。家族を大切に、仕事も人一倍熱心に取り組み、しかも研究者として一流の業績を挙げた坪井先生の生きざまは、後進の在野研究者の手本となり、励みともなると思う。ここでは、生活者としての坪井良平に焦点を当て、彼の半生をたどってみたい。

坪井良平は1897年1月30日に大阪で生まれる。父は家作からの収入で生涯を過ごした趣味人(古美術愛好家)だったという。高等小学校を卒業すると、父の勧めで大倉商業学校に進学する。この学校の教育は厳しく、年々多数の落第生を出している。卒業の年には旧制高校の英語教科書で授業が行なわれたそうである。坪井は英語が堪能であったが、ここの教育のお陰かもしれない。私生活では、幼少期からの習慣で父の道楽に付き合い、金石文の拓本採取の手伝いをする。当時はどの寺でも梵鐘の鐘銘や碑文の拓本採取について許可をくれたが、種々の事情からなかなか拓本採取を許可してくれないところもある。島根県の某寺院では新羅時代の朝鮮鐘を、拓本採取はおろか見ることも許されなかった。すると坪井の父は、玄関先で頑固一徹の老僧と押し問答を繰り返して、「まげて何とか見せていただけないか」と懇願して、やっと鉄杵越しに見学できたという。ちなみにこの40年後、坪井が再度同寺院を訪ねて往時の経緯を若い住職に話し、拓本採取の許可を得ることに成功している。坪井は往時を想い、涙で頬を濡らしながら拓本採取し、帰宅後それを仏壇に供えたという。

良平は仕事の面でも様々な辛酸をなめている。大倉商業学校を卒業した直後就職した大倉組では、翌年には人員削減のあおりを受けて解雇される。その後奈良県の第六十八銀行に勤務するが、自己都合により半年で退職して中村儀助商店に就職。中村儀助商店では、貝ボタンの輸出に関わる通信文の翻訳、輸出手続き等、英語に関わるすべての雑務を引き受けていたそうである。ここで3年ほど働いたが、猛烈な脚氣を患い、一か月の静養後退職している。この商店の、江戸時代さながらの丁稚奉公の実態、若主人の放蕩、番頭(番頭)の墮落ぶりに嫌気がさしたのだと思われる。その後就職したのは久原商事であった。海外に十数か所の支店を持つ「総合商社」であったが、社員のほとんどは神戸高等商業学校を出たばかりの「ホヤホヤ」で、英語の通信文はおろか、電報の打ち方さえ知らない連中だったという。坪井は自叙伝に書いていないが、実力もないくせに「高等商業学校」の学歴をちらつかせる同僚たちに強い反

感を持ったことだろう。なおこの久原商事は第一次世界大戦終結後綻ぶが、坪井は久原商事の「残党」によって設立された「久原商事部」に残ることになる。横井シズ子と結婚したのはこの苦境にあった時代であった。結婚の条件は何と「従来通り父に仕送りをする事」だったという。食い扶持が一人分増えたので、父に仕送りするため、勤務終了後夜間に英語を教えたりなどして収入を増やし、その分を母に渡したのであった。シズ子と結婚した1年後、坪井は東京支店勤務となり牛込区原町所在の一軒家に居を構えるが、同じ頃妻方の父が亡くなったため、妻の二人の妹をここに引き取って面倒を見ることになる。坪井はこの苦しい生活の中でも研究心を持続し、関東各都県の梵鐘の拓本・実測を採り続けたのであった。ちなみにこの東京在住時代に森本六爾らと知り合い、数人で「考古学研究会」を立ち上げたことはあまりにも有名である(この会は、数年で自然消滅。1930年に東京考古学会として再出発する)。坪井は、貧しい家計のやりくりをして彼の研究活動に理解を示していた奥さまに対し、常に感謝していたという。女房の妹二人の面倒を見ているのだから、もう少し強気に出てもよさそうなものである。1922年の暮れ、古ぼけた坪井の洋服を見かねた奥さまが、「一つ新調したら如何」と勧めたところ、「洋服は裏返して我慢しよう」、その代わり正月の三日間潮来の調査旅行に行かせてくれぬか、と頼む坪井であった。

1928年、坪井は大阪鉄工所を主宰することになった上司に引き抜かれ、大阪に居を移すことになり、森本ら関東の研究者とは一時疎遠となる。大阪鉄工所は、主に造船を扱う会社だが、造船設備は貧弱で有能な技術者も乏しかった。そのような会社で坪井は新造船に装備する艦装品や室内調度の海外への注文、果ては「ロイド」(船舶と設備の安全を審査する英国の団体)の検査官の対応等雑務が山程あったという。そうした超多忙の中で再び研究の虫が動き出す。京都府の南端に、「木津惣墓」という旧墓地が存在していた。室町後期から現代に亘る墓標群は総数約3300基。これらを坪井は1930年から2年半に亘り、一時の中断を除いて殆ど毎日曜日に調査してその成果を『考古学』10巻6号に発表したのであった。この調査中、過労がたたって急性腎臓炎を患う。

1936年1月に盟友・森本が亡くなると、彼は東京考古学会の雑務と経理を一切引き受けただけでなく、森本の遺業『弥生式土器聚成図録』の編集・出版にも側面から尽力する。実をいうと、この事業に対して服部報公会から森本に交付された資金(2000円)は、森本の医療費などで既に遣われてしまっていたのである。それで、服部奉公会への義務を果たすために、藤森栄一らに自腹を切って旅費を与え、資料収集を継続させている。あまつさえ、小林行雄の奮闘で図版・原稿が揃うと、刊行費用を提供して上梓に漕ぎつけたのであった(1938年)。毒舌家を自認する清足が、父の訳書(セイス著『未開民族の文化』)復刻版「あとがき」に「愚息坪井清足」と署名したのは、父への心からの敬意の表れと私は思っている。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第17回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第196回) 江上 輝 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第14回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「日本海側最大級の貝塚 小竹貝塚」 忍澤成視 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第14回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

14. 学位論文修了とガンジダレ遺跡調査

1973年はすいぶん忙しい年だった。前回で触れたモンリオールでのカンファレンスは8月28日から31日まで。それに先立って、発表論文を集めて全員に配布するについて、今ならそのような配布はコンピューターのボタンをいくつか押せばできてしまうところだけれど、当時は、世界各地から送ってくださった原稿をガリ版に謄写して20部ほどのコピーを作り、それをまた一つずつ封筒に入れて世界各地の参加者に航空便でお送りするという手配が必要だった。それはともかく、一番大変だったのは観光シーズン真っ盛りのモンリオールで、ダウンタウンにあるマギル大学の付近に、参加者とその同伴者に滞在していただくホテルの部屋を確保することだった。

そのような手配と交渉で忙しいいっぽう1973年の春から初夏にかけては私自身の学位論文の最終段階でもあった。1970年以來フルタイムの助教授として授業を受け持ち、委員会の事務などもして人類学科にとっては便利な人間になりつつあったようだが、それらの仕事におわれて学位論文の終結が遅れているので、助教授は通常3年契約で任命されるどころ、一年ごとの臨時的な契約更新をくりかえしてきた。これを正常化するために、カンファレンスの事前準備と、事後整理に平行して、学位論文の締め括りをすることにした。

1965年に論文のテーマを設定した際の意図は、日本の先石器文化を、総合人類学の一部としての考古学という枠組みにおいて解釈してみようというつもりだった。いざとりかかってみると、毎年増加してゆく資料を全部扱うのは無理なので、「前期」旧石器にしばることにしたが、それでも「日本の前期旧石器文化の検討」(Early Palaeolithic Cultures of Japan: An Appraisal)と題する論文は700頁近くになりつつあった。

8月末にカンファレンスが始まる前に末尾につける要約の章以外はモヴィウス先生に読んでいただいていた。最後の章をモヴィウス先生に送ったのはカンファレンスの論集に「結語」を書いていただくために発表された一連の原稿をお送りしたときだった。ハーヴァードの制度では博士論文の指導・審査委員会は通常3名、私の場合は主査のモヴィウス先生に加えて、中近東の先史時代を研究してられるランバーク・カーロフスキー博士(C.C. Lamberg-Karlovsky)とヨーロッパの新石器時代をご研究中のトリングラム博士(Ruth E. Tringham)だった。1973年の秋、私がカンファレンスの原稿集の編集をしているときに審査委員の先生方は私の論文を読んでいただいていたようで、1973年の暮れには審査通過との通知をいただき、翌74年6月の学年末に学位を授与された。

学位の件も決着したので、1974年の夏は、夫フィリップが1965年以來調査しているイランのガンジダレ遺跡の発掘に参加することにした。ガンジダレはイラン西部のザグロス山脈中の小さい谷間に散在する遺跡の一つで海拔1400mの地点にあり、直径40メートル、高さ7メートルの小さい塚になっている。1965年の試掘以來、1967、69、71年に発掘調査をしており、この度が4回目、そして最後の発掘調査となった。これまでの調査で上からA、B、C、D、Eと5枚の文化層が確認されており、放射性炭素による年代測定によればE層からA層までBC8000年頃からBC7000年頃まで約千年間の生活の跡をとどめている。

フィリップは、調査開始前に首都テヘランにあるイランの考古学センターで打ち合わせや交渉をし、その後現地で発掘作業員や宿舎を調達したりしなければならぬので、5月半ばにイランにむかった。私と息子ダグラスは一月おくれて、6月13日にテヘ

ラン着、空港にフィリップの知り合いが手配してくれた車が待っていてくれたのに乗って約10時間、うねうねした山道を通って、調査団が滞在しているハーシンという町に到着した。調査団といってもこじんまりした構成で、フィリップとイラン考古学センター派遣の考古学者に加えて、カナダ、アメリカ、デンマークから参加した大学院生4名、それに私とダグラスが合流した。私は出土品を登録、保管する資料室の責任者、14歳のダグラスは非公式カメラマンをつとめる。そして周辺の農村から雇った約20名の作業員。夏は農閑期なので、遺跡での仕事は大歓迎で、「わたしも雇ってください」、「うちの息子も使ってください」との競争が毎度大変だとのことだ。

遺跡は宿舎から車で約20分くらいのところにある。日中は大変暑くなるので、フィリップと院生たちは早朝6時ごろに宿舎を出て、涼しいあいだに作業をし、午後2時ごろには宿舎にもどる。その後は出土遺物の整理やフィールドノート記入に過ごすという日課だった。私はほとんど毎日資料室で出土品の分類、登録に過ごしたが、たまにはフィールドの状況を見に行ったり、時には人骨を取り上げたりするのに動員されることもあった。

5枚の文化層のうち、上の4枚、A、B、C、Dの文化層は日干し煉瓦を積み上げた家屋からなっているが、一番下のE層には建造物は全くみられない。定住生活以前の狩猟・採集民の残したものとおもわれるが、石器の作り方などについてはE層からD層にかけて連続性がみられるので、居住集団が入れ替わったとはおもわれぬ。それに、非常に少数ながら、土器のかけらと土偶数点も出土している。土器に関しては、その上のD層から精巧な土製品が多数出土している。ここに示すような小型のツボやハチの他、高さ1メートル前後の大型の容器がいくつか壁にもたれかかった形で残っていた。

植物遺存体はほとんど皆無でコムギ、オオムギと豆類が少しばかり採取された程度だが、動物の骨は、シカ、ウシ、ブタ、鳥類など5万点以上、その中でも多いのはヤギで80%をしめる。当時コロンビア大学の院生として発掘に参加したブライアン・ヘス(Brian Hesse)は、この獣骨群を学位論文の対象として分析した。彼によると、E層出土のヤギの骨は性別・年齢の分布からみて狩猟の結果得られたものと考えられるのにたいして、D層では18ヶ月くらいのオスの骨が圧倒的に多くなる。これは、家畜化の方向に踏みだしたことをしめしているとのこと。日干し煉瓦にヤギの足跡と思われるのが残っているのも、住居の近くをヤギが歩き回っていたことを示している。ガンジダレ遺跡は食料生産文化としての新石器時代の始まりを示唆する遺跡として興味深い。



▲ガンジダレD文化層(BC7500年頃)出土のツボ

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ロードリア大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ロードリア大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以來名誉教授
1999-2000、2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 196

東村跡〈那覇マチ(ウフマチ)地区〉～沖縄県那覇市

江上 輝

私が紹介する遺跡は、那覇港周辺遺跡群のひとつである「東村跡〈那覇マチ(ウフマチ)地区〉」です。東村跡は現在の那覇港の北側に位置し、周辺には西村跡や渡地村跡、冊封使(天使)のための施設・宿舎である天使館(現在の東町26-1付近)や中国をはじめとして東南アジア・朝鮮・日本との交易品を収納管理していた御物城など、琉球王国時代の那覇港を構成する重要な遺跡が点在しています。



▲那覇市誌史地図(明治初期の那覇) 作成者: 嘉手納宗徳

琉球王国時代は、西村・泉崎村・若狭町村とともに「那覇四町」として称され、那覇港を中心として栄えた商業の街であり、特に東村は那覇四町のなかでも手元村といわれ、戦前まで旧那覇の経済の中心として繁栄していました。

東村には商人や手工業者が多く住んでおり、いくつかの市場があったとされています。市場の創設期については不明ですが、「朝鮮王朝実録」の世祖7年条(1462年)に市場についての記述があり、15世紀後半頃までには市場が創設されていたと考えられます。また、16世紀の「冊封使録」には女性が商いを行う市として、17世紀の「中山紀略」には天使館の前の空地に人々が集まり市を開いたと記載されています。

1879年に沖縄県設置(琉球処分)が行われると東村・西村には日本本土からの寄留商人が店を連ね、米穀・呉服などを専門的に扱うようになりましたが、日常品(野菜・雑貨など)は王国時代と変わらず、旧天使館の前の市場で取引されていました。明治末期頃になると、久茂地川河口の埋め立てが盛んにおこなわれ土地が拡大したことや、大正2年(1913)の東町一帯にて起こった大火災後の区画整理もあり、市場は天使館近くから南側(現在の旭橋交差点付近)に移されました。そして後に、那覇マチ(ウフマチ)と呼ばれる県下最大の市場となりました。

しかし、1945年の沖縄戦によって那覇マチ(ウフマチ)周辺は焼け野原になりました。そして、戦後の区画整理によってその面影は姿を消してしまいました。

この市場の周辺では過去に県・市によって発掘調査が行われており、琉球王国の繁栄を忍ばせる多くの中国産をはじめとする陶磁器や遺構が確認されています。このような状況の中で今回紹介する遺跡は、民間業者のホテル開発事業に先だって平成30年度2月末から3月の初めにかけて行われました。

調査の結果、那覇マチの頃のものと思われる建物を取り囲む石積み・レンガ積み・大溝・小溝・床面などの遺構が確認されました。

床面にはモルタルが敷かれており、水はけを良くする機能が考えられ、衛生面を考慮した那覇マチの様子を伺うことができます。

また、土の堆積状況から幾つかのことが判明しました。1点目は、

黒く炭混じりの土が2層堆積しているのが確認されたことです。これは大規模な火災の痕跡と考えられ、堆積状況や出土した遺物の状況から推察すると10・10空襲と大正期に発生した大火によるものと考えられます。



▲大溝など検出状況(筆者撮影)

そして2点目は、沖積層と考えられるカワニナ混じりの灰青色土層の堆積が近代と思われる遺構の直ぐ下層から確認されたことです。1868年段階の絵図でこの場所を確認すると海岸部分だと分かります。そして、明治期の文献を確認すると1884年には「仲毛」(久茂地川の中州)が埋め立てられています。これらのことから1868年頃～1884年頃の間で大規模な造成工事が行われ、1884年以降に今回確認された近代の遺構が構築されたと分かりました。

出土遺物としては、沖縄産陶器の碗・皿など日常雑器が数多く出土し、数量としては少ないながら、18～19世紀の中国産青花なども出土しています。また、大溝遺構からは、魚骨・貝などの動物遺存体・銭貨(寛永通宝)が検出され、この場所が那覇マチの魚市に隣接していたことが想定されます。

このように今回の試掘調査で、近代の那覇マチと呼ばれた市場の様子と近代期に行われた土地造成の状況を垣間見ることが出来ました。

現在は、かつての島々を取り囲むように海岸線が大きく埋め立てられていますが、かつての那覇は、浮島と呼ばれており大小の島々によって形成されていました。その当時は、水も満足に取れないような島々であり、島間の行き来も困難だったようです。1451年に島と島を繋ぐ「長虹堤」と呼ばれる海中道路が完成したことや、時代ごとに行われた土地造成により、王都と那覇が繋がったことで、人・物などの往還が活発になり、那覇は琉球王国の経済の中心になっていきました。

現在、かつての那覇の中心地であった西町・東町には開発の波が押し寄せています。今後は、重要な各遺跡の保存は勿論のこと、琉球王国の玄関口であった那覇がどのように発展していったかを調べる上で、土地造成の様相の復元を行っていくことは、琉球王国の歴史を語るうえにおいても重要と考えられます。

最後に今回の試掘調査では、遺構の広がりか断片的であったため、試掘調査のみの対応となりました。ただ、我が国においては1996年に文化財保護法の一部改正により近代の文化遺産も含め文化財として保存・活用する施策が始まっています。また、2015年には「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として世界遺産に登録されるなど、世界的に近代遺跡の認知度は高まりつつあります。今後は、埋蔵文化財の分野においても近代期におけるデータの蓄積を図り、那覇の近代における様相を復元できるようにしていきたいと思えます。

参考文献:

沖縄大百科事典刊行事務局1983「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社
沖縄県立埋蔵文化財センター2017「東村跡」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
那覇市歴史博物館2008「那覇市史」那覇市
那覇市2014「東村跡」那覇市文化財調査報告書 第99集

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは天久瑞香さんです。

考古学者の書棚

「日本海側最大級の貝塚 小竹貝塚」シリーズ遺跡を学ぶ129

町田賢一 著／新泉社(2018)

忍澤 成視

1 数少ない日本海側の貝塚

全国には、約2,500か所の縄文貝塚があるとされている。このうち半数以上が関東地方にあり、東北、九州、東海地方がこれに次いでおり、日本海側には少ない傾向がある。貝塚は、潮の干満により出現した広大な干潟を舞台にした活発な採貝活動の結果つくられたものと考えられ、この現象が太平洋側に多く、沖合すぐに比較的水深が深くなる日本海側では干満差が顕著でないため、貝塚があまり作られなかったのではとされている。

2 発掘調査の経緯

小竹貝塚は、富山湾に面した射水平野の末端部、呉羽丘陵が迫る低地に立地する。射水平野は、かつて放生津瀧ほうじょうづがたと呼ばれる瀧とその周囲に広がる低地であった。小竹貝塚がつくられた縄文時代前期には、海進の影響で集落近くまで海が入り込み、その後急激な河川の沖積作用で埋積したものと考えられる。したがって、遺跡の上部には約2mの土砂が堆積したため、良好な状態で保存されることとなった。しかし1950年代、架線電柱工事の際、地下2.7mの地点から大量の貝殻や土器などが発見され、地元教員らによって縄文貝塚の存在が知られることになった。

その後これらの人びとの地道な活動で、貝塚範囲の記録や遺物回収が行われ、自費出版物として1977年、骨角器の写真集が出されている。ちょうどこの頃、骨角器を研究する学部生であった筆者は偶然この本を目にし、その量と多様性に驚かされた。

その後も用水路改修工事、架線護岸工事などで遺跡の部分的な調査が続けられたが、2000年代になり、当該地が北陸新幹線の建設予定地となったことから、貝塚の本格的な調査が実施されることになった。

3 ムラの変遷と生活の様子

小竹貝塚におけるムラの形成は、縄文時代前期中葉にはじまる。台地部分に掘立柱建物や土坑をつくり、低地では木材加工やその管理を目的とした板を敷いた作業場もみついている。また低地からは、土器や石器、鯨類などの動物遺存体、ヤマトシジミを主体とする貝塚も検出された。ムラの最盛期は前期後葉で、台地部分に9棟の竪穴建物跡がみつかり、低地では厚さ最大2メートルに及ぶ貝塚が形成された。また、炭化種実を集中して廃棄した場所もみつかった。さらに貝層中からは埋葬人骨91体が検出され、墓域の変遷も明らかにされている。そして前期末葉、ムラは竪穴建物1棟に縮小するが、大規模な貝塚と遺物包含層は残されていることから、遺跡の性格が居住を目的としたものから別のものへと変化したと考えられている。

低地性の貝塚は、動物遺存体ばかりでなく植物質の遺物が良好に残るため、まさに縄文時代のタイムカプセルと言われる。小竹貝塚では、この情報を余すことなく得るために、実に8万4千袋に及ぶ貝層サンプルを最小1ミリメッシュのフルイ上で水洗選別し、微細遺物の回収とともに、その内容を詳細に分析した。その結果、汽水域のヤマトシジミ主体の採貝、クロダイ・

スズキなど汽水、フナ・コイなど淡水での漁労、ニホンジカ・イノシシ主体の狩猟、カモ・カイツブリなど湖沼や河川など淡水域での鳥猟、シャチ・イルカ類・クジラ類・ニホンアシカなど内湾から外洋での海獣猟などが活発におこなわれていたことが明らかになった。これらに関わる道具類としては、ヤス・釣針・錘・針・鎌・銚・ナイフ・錐などが、さらに丸木舟・木製容器・石斧柄、編物・縄・樹皮製品などがあり、また植物質の遺物では、クルミ・クリなど堅果類、マメ・シソ・ヒョウタンなど栽培植物が検出され、実に多彩な生活ぶりが明らかになった。

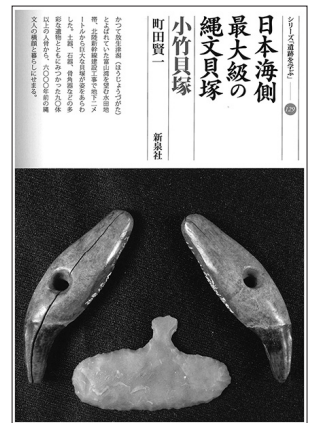
4 多様な装身具と遠方からもたらされた物資

石、動物の骨、鹿角、歯、貝などで作られた様々な装身具が出土している。石では滑石などをういた球状耳飾・管玉類、歯ではオオカミ・ツキノワグマ・サメの垂飾、骨・鹿角製の髪針や簪、ベンケイガイ製の腕輪(貝輪)が特徴的である。このうち希少なものとしては、タイ科の歯(切歯と臼歯)多数を象嵌した漆製品があり、貝殻の一部を埋め込む螺鈿細工に類似した製品の一部ではないかとみられている。

石材は、信州の黒曜石、岐阜の下呂石、糸魚川のヒスイ、木製品は福井の遺跡類似品、土器は東北、新潟、長野、関東、近畿地方の特徴をもつものがあるなど、遠隔地との交流が見られる。このうち最も遠隔地との関わりを示すのが、オオツタノハ製貝輪である。この貝の原産地は伊豆諸島の一部と大隅・トカラ列島・奄美諸島の一部にあるが、小竹貝塚事例は、近年、佐賀市東名遺跡で早期末の資料が複数検出されたことを勘案し、九州方面から日本海ルート経由での搬入を示すものとして注目されている。

5 縄文人骨は語る

日本列島全域では、これまでに多量の人骨が出土しているが、その主体は縄文後・晩期のものであり、早期・前期に属するのは稀である。この点で、小竹貝塚から見つかったおよそ100体の埋葬人骨は、考古学・人類学にとって極めて貴重な発見と言える。仰臥・側臥、伸展・屈葬など多様な埋葬姿勢がみられる一方、土器棺や抱石など年齢や性別による習慣、さらに石器や土製品、骨角器などを特定の人物に副葬した事例が見られるなど、その習俗の在り方も注目される。性別、年齢、身長、骨に残る疾患や形質変化の痕跡、さらに遺伝情報や食性など、新たな科学的手法による分析によって、今後さらに多方面の研究に資料提供することになるだろう。



アルカ通信 No.203

発行日 2020年8月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp